

榎倉康二 1960年代絵画作品における空間と身体

佐原しおり (早稲田大学)

榎倉康二は1970年代以降、木や土、コンクリートなどをもちいて事物の存在と人間の知覚のあり方そのものを問う作品を制作し「もの派」の作家として知られるようになった。また油やアクリル塗料による「しみ」や「にじみ」の作風は静謐でありながら、鑑賞者の知覚、とりわけ皮膚触覚を刺激するものであり、榎倉独特の表現として評価されていった。本発表は本格的な作家活動がはじまる以前の1960年代後半に描かれた絵画作品をあつかい、そこでの榎倉の空間や身体への意識が、70年代以降の作品と密接に関係している可能性を指摘することを目的としている。

榎倉は1962年に東京藝術大学油画科に入学。さらに1966年には同大学大学院に進学し、68年に卒業するまでの6年間在籍していた。この間に制作された作品のほとんどは絵画作品であり、生物や細胞を連想させるような丸みを帯びたフォルムが描かれる点の特徴である。しかしながら彼自身が後にこの時期を振り返って、絵画との「訣別」を語っているように、亡くなる1995年以前にはこの時期の作品が公表されることはなく、批評の中で触れられることもなかった。

初期の絵画作品が見られるようになるには、「榎倉康二遺作展 1964—1995」(東京藝術大学芸術資料館、1996年)、「榎倉康二展」(東京都現代美術館、2005年)まで待たなければならなかった。さらに言えば、それ以後もこれらの絵画作品(主にコラージュ)に登場する「目」と、榎倉が影響を受けた画家である鬮光や、ジョルジュ・バタイユの『眼球譚』との関連性を示唆する言説は見られたものの、資料を踏まえた十分な検討はなされてこなかった。

発表では上記の二つの展覧会では未公開だった作品も含めて、初期絵画作品を検討していく。描かれたモチーフはかろうじて人間の肉体のような形を留めていたものの、しだいに人間とも物体とも判別のつかない有機体に変化してグレーを基調とした空間を漂い、不穏なイメージを呈している。発表者はまず榎倉のこのような表現が、敗戦後の日本における身体の表象の系譜とつながるものであることを指摘したい。次に、初期絵画作品における物体と空間の関係の描きかたに、後の榎倉の作品で顕著となる人間の身体認識や「接触」の概念への関心が見られることを確認していく。またそれらを読み解く資料として、榎倉が残したエスキースと、彼自身が所有していた書籍を参照する。当時榎倉は様々な画集のほかに、シュルレアリスムや心理学、哲学の書籍だけでなく、国内外の作家の小説を熱心に読んでいたことがわかっている。

以上のような考察を通じて、これまで確認されることのなかった榎倉康二の初期絵画作品の全体像を俯瞰し、さらには「もの派」など同世代の作家と関心を共有しつつも、独自の表現を獲得していった榎倉の創作の端緒を明らかにしていきたい。